

和書類從

三百四上

			和書門類
九	二	九	
五	〇	九	
九	四	五	
五	〇	七	
類	架	函	冊

庫	文	閣	內
二	九	五	和書類
四	七	九	
一	〇	五	
八	〇	五	
架	冊	號	類

內閣文庫	
番號	和 9595
冊數	670 (382)
函號	214 39



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



群青鎮信卷第百四上

繪伎傳巻八集

遠近都六

内不元二七上

世傳... 繪伎傳... 遠近都六... 内不元二七上... 群青鎮信卷第百四上... 繪伎傳巻八集

なとありハ法ありとよはせかたつてのゆゑも
はとゆゑとよきありし又落るるもかあへ
お人ありしはあふたれありけりゆ
みゆらひあつたつていさげうらいてゆかりの
りかき

やまを歌のたむじうとて代りありよお勢の
うみのあさこのまれかたきげうらいていけり
松本ありかたきとまはうつていゆまにまら
のこらよけりははるあそびおあ道ありゆれ
こもゆらと代りありゆりゆれとけくと山

れありもかたきおあこのうとてゆらうとてい
りとおかくゆり
ゆらに神の道ハ天のうらとすきげくまに
つとてかたき人ありゆれとてゆれいあり
をいかにありゆりまははるあそびのちもよゆり
むらうとてゆらありとていさげとてそのゆら
水之瀬川ありありいも教をたつたゆら車とて
なりゆらあり百もせありれとていさげとて世に
ありとてありありとていさげとていさげとて
とてとてありゆらあり道のひらとていさげとて

後鳥羽院
長阿彌 信照 救世 良阿

なん又このよき名ふ名ありて
二條大岡
は代おひと可なり二條をこのとけりて
枚録
ゆもすよ物もすうはゆりたを
さあくのたの目うけさるめ
たよれ清事なりはゆりもの
へりも

さそその二條は名うて
二條をこのとけりて
さあくのたの目うけさるめ
たよれ清事なりはゆりもの
へりも

かみはくも集れよの集い
け道よ心ゆりのも
をとりて尋ねる人き
けり中はこるなり
まはるる人か
とにのよ成ゆり
又新の道も中つ
さもかりゆり
先人よりゆり

ももたふしつこもあつたの仙教をほくしてまを
 かりけつるるく此風をきくひ花びつして道の
 おくげうさふ世ふ時めさつひしといふよふ
 のに何とんをゆりまはあれこかとおくとも
 うらふことうと紫の露もろろひ心の花は白
 すくめく妙くゆさゆりかこかんうれなりあつこ
 かにすさあさうよありゆりと源の金者後と
 中人冷泉め秀黄門よはさつてうらまうくけ道は
 おあしてあへるはもろろわが道なき
 おうつ病入ふとれつめひてつとくし正做和書

じまれあひ結してさあさうらうたうさま
 てと紫の林のあつと尋ねるの泉は花びは
 して水うらういともあつ水のこくつさうらうゆり
 さいいりり病つりめひひりや屋あつらうらう
 免ん又とあつれんと紫を世あひうくまれば
 ことおかりゆりとかま
 かりうらうさうらうのあさうらうらうと紫れ色
 こ中はうらのふれをさうらうひゆりに右山の
 らは川をれ流すれいんをゆりとかまんとも
 うらうゆさゆりやらん

一巻のあけぬ花のまじゆ下 定家卿

その人の内はゆふのちふ人より花のまじゆ下

じすふ文おはうらうらふもなう

ふ代たまりごらうらふははれとけし 頂覚

うしうしとけしとけしゆらへく式

うんひめれうらうらふも春ふて

かすあじいさうらふれらうゆさし 家隆

はらふらうらふいめらうらうさうさう

じすよの神よとるも新うせ

いくねもあはぬ娘の弟まうらう信照

神よのうらうらふはけらうらうはは

ねうらうらうらうらうの梅

うらうらふのうらうらうらうらう

はらふらうらうらうらうらう

うらうらうらうらうらうらう

うらうらうらうらうらうらう 良阿

馬おとらうらうらうらうらう

らや川うらうらうらうらうらう 故阿

けおのうらうらうらうらうらう

上乃秀造かると也けらうらうらう

よいとまかり
 道のうす井にうすゆることいふは
 雲霞ありては事にいゆるらじ
 先づこれ下ゆるは雲津抄なるにも
 とてあつらひに天竺もろくは文と
 小むゆはゆめ万葉集二代集伊勢
 くらかそめらゆえと方角われえ
 こ紫のくさくさ凍氏披衣あり
 しくうめはさるん新入は無下
 ゆう葉葉集はむじこあのくへ
 人らこと

こころはやく心越えぬ
 かりなりつたにてもあこと
 いふかり女房かこちりて
 けさぬくのことゆかとも
 侍るこへ月定家郷六寛平
 うけゆるはかてう道よ
 孫ひしと也万葉集のこ
 られおの上かえり又自在
 雅とけくしけ通のさる
 の新伝り作かえりし

御製 後京極拾政 慈法和尚 俊成 定家

家隆 西行 寂蓮

けおふんしと紫名くさめくの凡骨ひんくお大
悟奈め名守流れさう井ありこれおの心すささ
下れ継さぬかこぼれんさるにんふ工支修りに
いつて連歌の巻拾つけゆんさる井成ささ
あふくこと也さる紀連歌大これ好士の句な
ら成のとも海をひゆしははみらの志實けさるも
よいさうししとさるへさる魚しと先ありさるさ
ら包利

かさうくさるれんの中ゆかほん句大ゆめゆ
こくたやいしとさる一ゆかさるを奉さ
中さる人さるさる

右人中ゆかゆことよほん句ハ歌の巻にあり
かさうへさる句もゆれいさるもささるに
のひさるはたかへさるあれと撰集か
其歌あささやうにゆれ百首みす首目下れ
巻に河より事ありとみさるさる
乃風神一さるさる式登句もあり
疾くれさるゆれハ一のすさるさる

もおこくどろりあえふいよへのらん句のさぬ
み風雅試つし地思せしといふとをさしはし
とまのりよいあそひけはききんをさして
れをのそそよもしてつらひはれはまし
かりて人の句にこひありきうといふにありけ
ゆりあやもきあもも文神をさしつらなる
へん時代よりつらなるもとりあう式

巻頭歌

藤原敏行

ゆめをたよめたるをたつささるまをさして
あふるまをささるまをさして

小大君

あふるまをささるまをさして

定家

あふるまをささるまをさして

正徹

あふるまをささるまをさして

奈句

二條景家

あふるまをささるまをさして

あふるまをささるまをさして

はらひめのかつらふま春くけて 家隆御

けお乃春はらん句もいさかきもろくはたけゆり
かきたおより事には久く式

眼の句はゆきも指家あそりけけりえくの
下れ句おにいさすすたつるへしたやうにい
ゆにらん句のんさうけむかしてけりをは

香花の系木花の家あまるとゆかに

冬さくじあよゆりろれ竹 故誦

けりれはさきことむきとあそりゆりさしあふお
らり又さうりさる風神さとしてあらん句

おといにほのまおくくくのとあうあつれよて無

なまし事もゆりへく式く席よりふよりん座
さういんあよ一おはまの六めんりさけりあ
事もゆり座しよて定めく事の道は

はあふお利んあうへさ町要あふこさあり
連歌とすお士の中に歌をさういゆりけり
まへゆりハ連歌よとんゆりあしへりあ

先まうりゆり歌とよくえさる作者は彼れ
しそふよらもゆりさうあも表歌をむはは
てせの西け餘情と句こにいさくじへこと

やあるそんうりうり詩意をもほかに借りて
し合ゆれに也古人の句、新の面影をいぬる人よ
ちをすけひてうらうらもいもぬんみきゆりむとりの
同昔神の御代々うて百新五千約と外く約
まのふれ、藤もうらもなうてかきみらみり
り、頃ひとへも新のんさうめひまうぬ好むは
の道におりひかゆりうり連歌乃まかこいうせ
あゆつうにぬる人さうあつものまらうり
るしおる

かへぬ人の中に秀句さこのとほくあつゆ

いあつてく式

秀句の成りた人も秋の家といへういも好む
にあつてい秀句の成りたの教とあつては道
不巧の好むい秀句さすばも作えぬ物也又あま
うにうひつさうさうて毎く秀句さとの中ゆら
いあつていあつていあつていあつていあつて
いあつていあつていあつていあつていあつて

後鳥羽院

あつていあつていあつていあつていあつて

頼徳院

有りすも圓心の志未だに安んずるや夏はあはれ

定家卿

こぬ人を待たぬ浦乃夕多きに望むもいほも

同

いほあはれぬ高きうぬ日もつたれの家れ気

家隆

風そあくをえれ小川の夕言はを死を夏はあはれ

同

天の秋の日は秋乃葉あはれこのよき好芳をや

世おれ治世あはれといふはあはれおあぐんう

下紅葉ちるにまゝなる雲升代

秋澄

昔れ根のあつ月のる夕乃角

同

おのそ本乃角好しては秋速秋作うらやえれん

糸と申ゆりちるあはれと秀乃角よりあはれ

あつものおのりさとし分別用んた切あつ

こけり

あつもの人お申あひゆるは秋速はすかおに

つらうくやうなるを神とせよれやうにゆあ

いさやうれ不誠採用とゆもつるゆえん

大しゆらなかにあつ

へしと也といふ巧のともかづられためことといぬ
かへくといふともあはれり事とゆかりゆかり
より力のいふぬやうにゆかりゆかりゆかり
ついにいふ事おのづかのいふ事ゆかりゆかり
れ先きいふゆかりゆかり式法ゆかりゆかり
ゆかりゆかりゆかりゆかり

諸宗は太祖純樹菩薩もいふゆかりゆかりの法を
いふゆかりゆかりゆかりゆかりゆかりゆかり
法文も追情もいふゆかりゆかりゆかりゆかり
ゆかりゆかりゆかりゆかりゆかりゆかり

天台もも列教といふゆかりゆかりゆかりゆかり
花巻もも列教といふゆかりゆかりゆかりゆかり
佛の子孫の中もも羅漢羅漢の志はゆかり
悲願第一の中ゆかりゆかりゆかりゆかりゆかり
四大菩薩の志はゆかりゆかりゆかりゆかりゆかり
定意の志はゆかりゆかりゆかりゆかりゆかりゆかり
二つゆかりゆかりゆかりゆかりゆかりゆかりゆかり
ゆかりゆかりゆかりゆかりゆかりゆかりゆかり
ゆかりゆかりゆかりゆかりゆかりゆかりゆかり
ゆかりゆかりゆかりゆかりゆかりゆかりゆかり

てぬやうなまへへたぐまよく強力あこい
へりうとあかり

たかひ時ち座をせむせりく一面やあかぬ時
ハ蘇おれ内もふあやうにわといへう降
荒津殿の非愛れとく平と理へゆり
又おのい子れ秋ハ觀算供奉目も神吟十れ
はるりいとこそや

詩もも賈誼ハやと孟浩ハさしりこと

定家ハ父の卿おと秋のさふは移んころの身
はゆりてと築おと秋と十れらあまといやと

らうにの志もわうとあうとさ秋ももやゆ
程おせれわやわもあうはちやうにゆり口木らけ
はあゆりてうにえんかう方秋をたとおわゆ
てさうあわわいへれ人のさもゆゆゆゆとさう
ぬりゆりゆりよこ志まふかうあうとさゆいさゆ
おゆりゆりかゆゆんこと漢お志つとゆゆゆゆ
後成御ことえゆゆとゆゆいゆゆゆもゆゆゆゆ
まへりゆりのかはゆりゆと志老もゆゆゆゆゆゆ
ゆりゆりゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
秋ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ありありと天性と骨髄なるは女の體なり
まことと毎く好くされども八十に到れば
もまかりとまらるへいふ人お思ふあり
お骨髄減るる事一のこと也いふもけまじい
はのり好く世一人にうへて濟をあり
病へりとか祭

かついなれ好くをいひ他人の體連なり
も麻衣賤するもいふはおこりあり
いとそいひいふよとの愛もて人の身なり
あつてすうへいといふや

先達お初傳ふやうに人の道お好けらぬも
うらみ人といふれの身もいふ心にせよぬ
さげいその元好くもいふなり佛法
もも論法古文則乃難陳切瑳縁魔心地
く方方便乃究用あり

淨仏國去教化衆生大業は大体也
法を講じて地獄も落るは恒沙の仏と供養す
らもいすられぬいふ法はあれるゆへに生死の
初ありと地獄よりいふれ地より起る
こと

良業はにけりくこへとも病成いやは

本は得繩找也悉後諫學也

純淑もけけ利瓦もみけけ玉也

魏文王仁差賢也也翟黄ういふあよふとそ

うとあひし

大は惜録不諫小は長罪不言

法は生縁と侍多と後多の

まことありと一念三祇三祇一念觀彼又遠猶如

今日われは久し禱名も只今の好奇も邪道

乃んといふ久しゆふおるりか久し

若能轉抱即同如來と語多り

初奈心時便成正覺らも云

かこられ好士の他人の執連執たごにいんき

てさあくのし業とそ人ゆかからりせんことも

あさうゆえく式

備にけと先達中ゆいつれのたもりも種らり

ういりて法はさうりかごご事と也その作を法

ゆとそご流思をくゆをて法もあさう

とえあつ作をれんさういんらうにちうひさる

事かゆかへくそて執乃の上子ハ法人のこよ

得れどもお別れ御ひあさるるに度のあるれあ
 る人ハ成やろけのとあり佛法も新道も御
 かん成えさるへりれとて先人ぞとて御り
 下に居く上成請さるふとと文あも平子あ
 どの思すうらにいり
 ほにいとこれ好まゆらその明聖に席あ
 いらひあもさるゆらとてそれまゆらゆら
 いう

めとひ百とせ平とひある一楚よあともし
 へさ道よあひとあ人のんと為そのうれ御

志んを君あさるあたひよひれうら成さる
 得ると、他人乃室れ中にあさるあさるのそか
 るとさるにまゆ物あはけ道かうら成さ
 成実成成さるやういああさるに秘事も
 加さるに定教の舎席も新道れと成後
 成御よ為成成ひとと人とも好あくの人あ
 ととていさめ成ひととあり又無教奇思純成も
 成さるあひ百とひあひとても
 半のおよまらる成とわらんあへて成
 成古ら成成も

文字法昨晴從孫師ありといふ

又句法すくこと志て尚ほなごりぬやうに勢
古す人ご事と云い

たやうなよりの時よきさゆりにゆれはさも
ありぬへく式されもいとゆるあつてくも
いそつゆらん道おんさゆり志とあつたう
人の玉れあつに老成爲り花のなうに自ひも
こじらゆもこれみらあつてし大層文殊の化
現あして志とあつてくもいそつてさゆらん
いよりのあれも列もねくえんよとあつてさ

ともあつてせんともうういやとくさやゆん

費とく一首改女日に詠をくこと也

宮内御の真珠とくさも毎うゆん也

公任つなのく詠新をいことせまてゆん

てもくらさゆりかといへり

長徳いり新法公任つよ難せられゆてそなよ

り病とありてみゆりぬ

まらうてれ満岳とわらんゆと流思志と

十らの内よ白翁とゆり

佛法よ宮上醜翻味といへりいふもぬきらん

既いぬあふくし
 たりこれ一庄のひらりるにるをさつはかばの
 刻多しは退散とされりいさるも時うつり
 まはさるあふぬやうはつあく好士ゆり如何
 古賢れりうとゆり二條大園さゆ年あめやし
 多さほ一庄の毎くあだたり徐文下りおひ
 しとあふそれもうりこそおれくも初天より日哺
 にいしとせん唐はんよらもゆりいやさゆりに
 あつくくし満家の心をもつらす事はけゆり
 好士の流思くしもいさるりれ事ゆりんささゆ

かうさあめんくゆりもあふたあひと也徳志の
 人のゆ中く心とえすまをすこと詞を心れはり
 ひしゆきしはけおれ人のひもれ内ささるりつと
 かく代秀逸とゆりいさるゆまうらに別のことに
 あふはん取もゆきくせんいのとあてせれあふれ
 けもゆりく思ひいれさる人のひもれうらうりい
 てあふゆたうへしこれ一字二字おとのうらな
 祭志るさけやせさむくうらうくくいぬん乃
 むゆひのあふ困人れらうりいはるりのあり
 後京極攝政家以詠歎了

今すまぬあらの雲をの板をうらむしめけりては
 けぬれ二字成いむうり玄妙不可説のこらよ
 ゆるころや被うしころ正徹和者も満こらふ成ころと
 ここと地獄の口ひにけ二字れありけり事よ
 あかきころしかと作務ひさしころと見えられ
 と満よりころとことれらとれころのこ也巧能の
 人りういんころけしひの底りういてゆるあ人
 けもころう日もられぬかよ成不巧れ好士の句ハ
 古れ上かりいしてぬらゆ人小片けあからんころ
 ハへてみるハあさあ人よあや違着にのこあ人

おかしことなり

大うこれ好士の句の妙とほすつさたら成もい海
 ころりたつとあふ成事と志しとと詞つたひか
 幽玄れ句成いころころにあゆるとかな
 け道いひえよ徐情幽玄れんすころ成ひひ
 しひのころとらあさおに幽玄感懐ハゆるへ
 と也新あも不明作として面新ころり成誦すらい
 みしと玉振のころとなり妙つとその人一人のこ
 こあへしかと定家つもあつと結んす
 兼好法師の月成はめあしのをみるおらあれ

秋の思ひあつて散るるれはる 本陰おきてすれ
あつてはるるをことごとくゆるえんあつて代

易陽はよ物のこやと月入てのらけ時とふ多と
くちあつてあつてれありと云

春風推孝花用日秋面格相葉落時

秋連秋意れ句あつてもは風俣あつてあつてはるる

言以の秋あつてあらかり意の秋あつての二三首あり

も流思かりと先人もいへり述懐意の句あつてあ

らよむじり底あつてあつてあつてあつてあつてあ

はる 不明俣秋

秋の思ひあつてあつてあつてあつてあつてあ

秋の思ひあつてあつてあつてあつてあつてあ

定家卿

秋乃思ひあつてあつてあつてあつてあつてあ

正徹

秋の思ひあつてあつてあつてあつてあつてあ

秋の思ひあつてあつてあつてあつてあつてあ

秋の思ひあつてあつてあつてあつてあつてあ

秋の思ひあつてあつてあつてあつてあつてあ

坐山仙女のこころ五湖の煙水の向新いこころあ

新連新も外機内洋外洋内機の句ありへ
 こ也十く一哉くく心よんぬくくくく
 西行の心も
 初らあをてよ洋のくく又いつく思ふは
 慈徳へ
 にかいりくくのれに町ありと世は道とみ
 仲実
 あく病とくか物とえつまにかの心い
 けお外機内洋の新るくくあはな
 よつとたんくく上いつくあてくくに室のり

又すこれらうくく心のはあうくくお
 おおぬをくくけさけらあま今のは
 外洋内機の新くくくくく
 けさか物とつきたりか
 いつくれをよ夢侍も月花雪はくくく
 けらけくも末は不背れくくくく
 まくく様ふみく侍く
 右人くく侍けはの好士けくく
 二條大岡の月卿雲客めくく句よも末
 美事ありく周阿法師花とくくく

と也これ作志のさふあはるは其の改は白紙も
とくくゆりけりや

奇れ題とくくりに上座の君も月花雪と梅
のくはくはとあけけお祝言年この句はも上は
即ちこの座歳を遊従としのこする好士も
れ中多せりあふ小道はまをこいさるるけりや
と多ん佛法も句はくろぬかぬ意ともとし
るあり景物と事とする好士は句にのみあふ
なれへし

未得人句系玉得人意系句ハ教意の理也

教権理実といゆり

心外有法輪廻生死一心是知即弄生死と
いふり

一度見一心永超誠生死

有為報佛夢中權果

あるあしと定意句と久らん独仏と梅と
この先達とるへうとる式
かこらるれ座をこにち先達の句もばもその
をばらふよえぬ風雅とハソウなりそつとるなを
とも道るるぬかすにゆり教連類ハハ句も何や

いづれも心ざしあそく稽古工事をなすべし
 不巧無智凡人のきこころ幽遠のこころをなれど
 りさる井とやうけりもあそくこころにあらはにせん
 ともひいしころりれをな抄おみ量る哉つと
 ても修りに冷懐自知のおおくハ芳幼うひる
 けり人しとあり
 定家卿の御代すこにおおり月夜お天女れ
 面影うにあられそとせとせんあゆひあ
 へしやし中ゆり
 人形あ人の御代ともたすその人のあつたのそえ

ゆりころりじやあゆみれる人の眼よハ玄妙
 奇形あそく
 杜ふ美りゆともあそくといふころと
 佛の法をも五子と慢いむころと
 ちゆり
 意を報るすこハ分別もつらへく或法あよ
 ころり
 西上人も御道ハあそく人の御代修りれそとの
 けりころり
 生活の修りなるといふ

經信の云和欽の隱遁乃らるし菩提成すじりま
 路其如實相の理之十一字におさめられしは
 成定家御は有法乎んてらよ稱揚し終極利
 後成の意ほよらひ終るるをかん人おのりす
 大事ありけ道よのよらるるをいふの由來成
 立の志想ありてすすて終るにあり
 終るるをいふは終るるをいふは終るるをいふは
 現し終るるをいふは終るるをいふは終るるをいふは
 りてありけ道よのよらるるをいふの由來成
 終道即身直法の終りなりとありてあり

終るるをいふは終るるをいふは終るるをいふは

篇序類曲流の五六亦成五仏五智圓明
 終るるをいふは終るるをいふは終るるをいふは

六義の六道の波羅密の六無量法等の傳也
 古今集灌頂をいへる密宗の一大事として傳
 傳るるをいふは終るるをいふは終るるをいふは
 后也綺語と論する時、終極をよも禪定成修
 するもみかふ志想ありといへる
 中譯は終るるをいふは終るるをいふは終るるをいふは
 ありてありけ道よのよらるるをいふの由來成

里あふのりりさふはひとんよすし色はつ式
神仙よろり子侍神ハ数とあつて侍ハいりり
此地神も奇物よたり連奇ハあふはあはつてい
さぬよも定句かとも玄妙のことにあつ侍
とありけえ悟利井ありとてめとへん
西有添色佛と云ふに南無觀世音
こはあつ侍の句にあつ侍とて神も数と
あつ侍とて侍ハすこもこは巧神のまか
る侍とて侍ハすこもこは巧神のまか
南殿ハ高野山とて

殿もあつ侍のまか侍ハすこもこは巧神のまか
大井川もあつ侍とて侍ハすこもこは巧神のまか

高野山

又和泉式部ハ小式部に侍ハすこもこは巧神のまか
あつ侍とて侍ハすこもこは巧神のまか
せり侍とて侍ハすこもこは巧神のまか

和泉式部

侍ハすこもこは巧神のまか侍ハすこもこは巧神のまか

今ものもより母よはくれ侍りしよハ小式部より
けハ切よりかへ侍れまはれよりけみより
こそ思ひよき侍りしとありかやうにありし
ゆりよきより侍りしよはくれ侍りしよ
く式部より侍りしよはくれ侍りしよ

秋連神よ元俗の句と申侍り事いふありし
おせ侍りやうん

すしこのやんをく心は信侍りしよとすしこの元
俗ハさしこやんをく心の俗ハすしこの元

まのう人をうん殿の元と云句に

夏さちよ風と月をんあつりよ

これハ風と月をんあつりよとすしこの元
よわ侍りしよこれの人よ小松の人と云句に
さゆりて月をんあつりよとすしこの元

春にあつりしよこれの元と云句に

七草かといふ紫と紫あつりしよとすしこの元
さゆりて月をんあつりよとすしこの元
すしこの元とすしこの元とすしこの元
あつりしよ

新よハ同類とて人の心と紫はあつりしよとすしこの元

こと事に中らるや連類するはいかゆらへさあわ
 先達よりと祭ゆりけあもけとし子とさうさあ
 へさあわわがさつ田舎人かといさこのふ乃句はも
 一字二字入るくちるハヤゆらとつかんあひて
 ころ物ありとされはんさういゆらう人の志とあわ
 しいゆらうさう句はもあすハゆらうりていゆら
 かとらよ句ハ一まもさあゆら作者ゆりふ般の
 かわ代古人ハ大いよまゆらゆらとゆら
 有象御す念れ松やまると中これゆらに年
 毎さうして信雅ゆらわいゆらのやますとゆら

一と此類は下のももて類やゆらとゆ
 香にめとゆらもゆらゆらとゆら
 うちゆらとゆらゆらゆらゆら
 花といとゆらゆらゆらゆら
 株の花はゆらゆらゆらゆらゆら
 作者いつれゆらゆらゆらゆらゆら
 いらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
 ともゆらゆらゆらゆらゆらゆら
 ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
 ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

け句らそお有りしうらや合侍もともあつひよ
人の心とおうす人さ作志よ侍もさハ中くめつがふ
是侍り妙しくれといふもふ利面白く式
耕よハソリケつとくあまうにさ井に入つてを
ハ嫌侍り連袂あいつく
け句は子よんを侍り心れソリケつとくこのつは
う侍りへしとて

本城さうやおのほつこのさふを

これおるめ侍りく辛うらけ好士たがあつと

まても侍りしめれお文字いませうしつりつとこれ

おる人し侍りえの多うあしはとハいさつこのつく

侍りへさう侍りさこあしお城さうも写つて式

百友弟や春れ向新あさみ花

け句ハすくこの入りつといさうつりもみしえんも

侍りとも侍りこれと文おとさあつハあさうらにむと

しといへう

結よハ未来記として嬉し侍り侍あり連袂あし

らうしめさうとに式

世句屋おさう侍りごおんいうのもおとれんさ

とあつといへう

ゆゑにむすの天々をくさるる花の風

秋の夕暮の月夜式

二れおれぬくひ来来記れ客一かえりいり

つもほけらとゆかりあり

秋の無んお着しつり体万系集りりき

ゆり連歌よりいぬ何

けりていおほくささゆりおとそ秋めさるる

種くの神連歌のなほひらうりももかいらんき

とてかきこし

月やる水のおらるる高屋もか

もやさぐ面れいぶよのけまぐも

かやうれ白くもま心お着れ随一かえりい

ゆり

歌にいさ海席類曲流とつふふと改りり

志し上下れ白のくさう改つりゆりこなる連

歌よいあらんうす式

先喫うりゆりけ事連歌の完用ありへけ

分別あさういなるていりらるるまゆら白は

作ゆらん好士も代々集のおりむき又他人の

連歌のまよりのおらるるゆりり式されい古今

業多しあもむとけこてはさうくゆり定家
 月明存記あとも事成つてく終人あしなん
 句と面おしくはらううい他人の句はあさめ
 へんはらうういさうのりことし作はうりく作
 好士はせりおひく終りの人あはれりされし
 成のれ人あさめううとうれへされをのれ人と
 あさめはうれへよし文もいへり
 篇序題曲流いおれ作さぬ也
 篇い人をさめうういままあすさうさぬ
 序いささかし身ゆり程のさぬ也

題い事ソいおあさめさぬのさぬ
 典その意題はあさすあ人い
 流いさぬはういいううさぬさぬ也
 け五れさぬは連続あも上下れあ句はいとらよ
 吟合しうりく心とあめの通し感情あさうう
 やうに右終の終さぬはあありあもさ連続の
 上句下句はもくさう人いけ用ふあさ人り句
 は毎く冠を是いささ皆はいうく事あひ
 ゆりさしは差悟あさ好士は結構れ句いさよゆ
 けいさめつ甲人さあさうゆりさむひゆり

大やうよひあうしつひのこしたるおとあふと
 思ひゆるれよとれおのうらにうあふはるはとい
 ひのうらひあうとおるにいひもをさせゆる人
 しとてあふはらう句にあつて句はつくる大切
 かり彼合十句よ曲のふあふと上句を合座席
 にあつて句れとちうはあふれしあうり
 ねいひいけいひあうしゆると
 けもむくひもさそあふあれ

月のうらうらとあふ言れ物あけ
 救済

かたうあふ田原又久とあふ

あふのこよあふあふあふあふ 善阿

氷とけても雪はもよあう

教うらあふあふあふあふあふ

けと句いあふあふに曲のふあつてとらうはひ
 あうりゆるあふよ上あふのつけあふとあふ席
 類あふあふあふあふあふあふあふあふあふ
 久々

面影乃とげくあふとあふあふ

花みよのうらあふあふあふあふ

まへうらあふあふあふあふあふあふ

あかてらやうとあ〜川のさき 山鳥のすゑお
あつこらういそんれ小松

邦と鳴や五月のあやめ葉あやめもあなぬも武
あやめの大和あなぬもあなぬもへら〜とあやう也

みらねの浅書れ活のあら〜あみ〜人お急後ら武
右陣門あなぬもあ〜い水のうも〜人お急ひあやう

又中にあう〜く〜序段とけら〜もゆりこ
れをハ半臂れ句とりあやうにや十り〜ること

らも段をえにゆ〜のハ秋あ〜けあ〜たやうにえ
せあ〜けら〜けら〜とゆり〜こと

誰か後文の進ら〜をぬら〜このいあ〜て
あ〜ら〜い〜れ〜も〜まのあ〜ら〜と〜と〜と〜と

う〜いあ〜れ〜と〜武士のハ十〜川のあや〜れ〜ら
い〜る心鬼も秋の色あ〜ら〜とあ〜葉のあ〜ら〜と〜か〜

又〜れよ〜似〜躰白せ〜ら〜とゆり〜れ〜五音
お通せ〜ら〜と〜へ〜ら〜ら〜秋は病や

い〜ら〜れ月よおの〜ら〜
秋風あ〜松の葉あ〜ら〜神あ〜と〜

か〜と〜ら〜ハあ〜と〜也〜は〜れ〜別〜客用〜と〜又連
秋あ〜もあ〜れ〜秋〜も〜れ〜と〜く〜あ〜句〜に〜由〜り〜と〜序

いにしよをさるる一俤ゆる古人の句もいかに
ゆる

神のいささけにひくもあり

いそせしみのにさぬいめか

うはさるるあはれしとてんめ

穰もつたささこのお根守はの心 周阿

ふりりあうさ事にあふさ

ひらひのあささうさ事にあふさ 救海

あはれ一句にさうさ事にあふさ

あはれ一句にさうさ事にあふさ

いそせしみのにさぬいめか

いそせしみのにさぬいめか

いそせしみのにさぬいめか

いそせしみのにさぬいめか

いそせしみのにさぬいめか

いそせしみのにさぬいめか

いそせしみのにさぬいめか

風賦比興雅頌六義也

風の句と之類の心

名いあうさ事にあふさ

救海

二条根家さるを邦公にきて榊揚しあたま
けりあふくし物よきく句のこころとあふらとを
風乃句といへり

賦のよき秋の心
たし川をばはゆふれすまに成あふり秋
これの物こといんばくく通しくろ句あまわ
かよ心をとり賦句あふくしこと

比のよきくへうれん

下お葉らうにまきしり宮居式
教の字はらうまよけくあふくあそくくあふり

此のよきくはこれり

真あふく秋の心

みりあふく秋の心

秋

先いとの物おゆんはくたふはえあふくあ
てあふくくあ具の句あふりへく式

雅あふくしうこれん

夏葉も花は秋の心

寂意

あふちいこと葉心はめくくあふりあふり
しう秋雅の句あふり

頃いて井新あふ

花積たうけり玉の砌らる。

成何

かめいしるあめ心れりあふ人し一頃れりあり
けおれりさるもあふりけりも一白りもあふり
らへりけりいふよ初一念を中計也古今集
序かてけりんあふりてあふりけりさけり
歌よ八十件とあゆりさあゆりけりさあゆり
連歌よあふりさあゆりさあゆり
連歌歌の道いさあゆり事あてもあゆりへさ
ゆりけりあ人のあゆりあゆりあゆりあゆり
あゆりあゆりあゆりあゆりあゆりあゆり

幽玄躰

詩歌

神政をさすいあのみかこま

神皇正統記

春日好みのえあふりあゆりあゆり

預覚

らもにすまんとつひくおくと

あさ法よひとりもあゆりあゆりあゆり
あゆりあゆりあゆりあゆりあゆりあゆり

故海

あゆりあゆりあゆりあゆりあゆりあゆり

あゆりあゆりあゆりあゆりあゆりあゆり
あゆりあゆりあゆりあゆりあゆりあゆり

故何

風のよこまてさあゆりあゆりあゆり

あゆりあゆりあゆりあゆりあゆりあゆり
あゆりあゆりあゆりあゆりあゆりあゆり

故海

あゆりあゆりあゆりあゆりあゆりあゆり

松風のさすいさへとぞすん 故舟

事て然体

人よとられん道ももあ

花は後木のこもと物もと春は系 良何

まのひしなも里に飛たれ

去るぬ舟の草あうまらおひつて 同

かこしらふと音やまらと成ぬん

麻の音このちあふれの心 同

くちり心よはえやまらん

舟渡すうは糸の房のちあう 信照

春雨あふれうらお境やそ

船よとやれら水とこそあ

高古倅

香波あめしとこそあ

うのこ八人のこもあうて 順寛

かうも波ささむらうまらうと

あしとあうら賀茂川乃水 善行

いはりおやと波れゆか

強よけハ花もお糸もらさうと 良何

みよりあるれは行ありし

三十一

三十一

日くぬのむ社の山谷れ鴨のあゝ 家隆の
かといつてつづにつとあさるん
寺らるゝあすの里に任あゝ
十佛

面白体

心あけくもよ成のりあゝ
んらう子れきふ成さるもあう成て 良行
さぬとのととあゝさゝあゝ

秋さむさ最れ唐の人すゝし 贈
本すゝよはけり梅のさゝる

らのとれ松のりさう月初く 信照

いまはさうしてをき久しきれ
をぬたいてけあうしとんあて 赦

人のうらもこうをおもさゝぬれ

松本初く海とささのつるにさ成けて同

一節体

あゝこれさハ神のくれあゝ 同

なよあゝあゝらうささ名れ龍田川 信照

あゝ枝はうすささる子のりら紫

人心あひさるぬいらみして 同

平野とよおのよはさく社るれ

多のつらかりの遠きはくらら 十仏

まら目般と一層とてさあさう

あまもこのひの家のいさこれ松 救済

ふらうあうさこといさなりて

う江のあささうたあの中 同

有心俤

橋とら心のさじさあられ

ゆきくしては川上の里りあや 救済

こられうらあさる心に成やとん

うらほのあめ林りあられ 長阿

ぬくもさうと子あのをさる川

あうらゆあはのさうは日あれと救済

人あさうらあれとさ

風うらあ本のさああさ 同

おやあうらあすさあうん

らもさあれあうさうらあう鬼をさ 同

長高神

かそあまうらに露むすあうら

春あもあうらあひのさあおて 順光

あまうらに遠ささああれと

玉あれのこゝろよさせら花の枝

信照

その名をもよふらひてとあらん多

去りいりれそのち山本

良河

まきらの人た敷とすくぬこ

こゝろにさしはせられおらまし 救母

おれらましをにけり式

うさきのけいのあゆみさく 若阿

いばかろうれに申の月

うさきのいさとしをさし 勢晴七 救母

強かれ句

おれらましをにけり式

うさきのいさとしをさし

おれらましをにけり式

うさきのいさとしをさし

おれらましをにけり式

うさきのいさとしをさし

おれらましをにけり式

うさきのいさとしをさし

おれらましをにけり式

うさきのいさとしをさし

任者小聖一花受主燃く殆多れ唯ふも好妙申
 兼にますせく物申や、謀よやみのうけよ
 可もおかつらふ事也
 け道おれも愈長れはふとあまううにむく
 ていつとみとありそはの先をて是れ物も若
 阿法師といふものてめれは阿耨多羅三藐三
 良阿十仏をくや、まほ貞法慈女のひより偏よ
 故阿法師は道の尊と皮の貴周阿索眼かして
 やむともかこのの物か、皮ホ、身内うて後慈
 永の比より、梵燈房主は道やん先まことその事

けすもつて、ま下法席かした心もやそ、初もえ
 んよそをよ、いなるうて、あうしと、まほ法
 の路より世子あそ、れぬ、い宗初法師、智度法師
 かしたる人し、皮ホ、法名和尚、下にて、ま
 候、信を、神の道をも、志れらあ、わそ、ひより、建、神
 乃、乃、御、さ、さ、さ、法、お、こ、と、と、み、あ、う、皮、ホ、ホ
 ま、か、う、て、後、け、み、ら、く、く、あ、う、物、を、と、か、ん
 い、ま、も、法、を、い、若、う、う、あ、い、て、く、光、も、さ、し、れ、れ、い、又
 く、く、さ、道、う、う、あ、う、物、を、と、け、ほ、い、あ、う、う、と、こ
 人の出、物、か、も、い、つ、ま、れ、は、う、う、法、つ、ま、あ、れ、の、人、お

らいてくす之遠と世我も照しゆらん黄ひら
に水れすめんそんも引くき智のいんり
ありんも千さそよさひかすゆれいぬれの
人う残りてゆれんさるるよのいぬれ世ひと
つそあつくもあありくもゆれけさぬくれ
徳ありくもゆれぬゆへりやあにさきあぬか
とのさむれしんかあさすことれり式佛の所
法をたよ心よとあゆれいんに落ぬかあさ
あけ道哉さうらんらんもあいまの道徳
一大事同縁と為縁あさあぬく生死と下

捨あゆれつとことば光の陰とくらして
さにいりゆれんもいふさひあそもああり
おろゆれあそあぬと捨あくさひときさゆ
れいけのほいあさよへも永く元
のへさしてさそあゆれゆれ使の門よまもい
月れおの十界を言れふ世あゆれとらん人そ
けらうあゆれそれもあささあか眼うら同
一性それいあやゆらあゆ人しもさうら大空
あいらうさ胸れうらあれいつさこれ道と整ひ
いうかり法哉つとあても其おごまるくさ

あつたに世よめいふき方法なり唯中なり
此程のりし何れ理のみをいふされまの不思
後勿くとも天統法おほむじつりのふく
や何事もともあつたあつたを



群書類後巻第三百四上

